完成した冊子には、外国人研究員三五八名（四三ヶ国）のデータを収録しました。一万人から随分と小規模になりましたが、彼らは、一年近くを敷地内にある宿舎で生活し、日文研に日勤し、専任教員とつねに一緒に研究を行っています。流暢な日本語はさらに磨かれ、日本人よりも巧みに日本語を駆使し、古文を難なく読み解き、日本文化の神髄を日本人に説くという、まさに国際的な日本文化研究者が熟成されていくのです。冊子作成は、この過程を辿る作業なのです。

現在は、新室長（瀧井一博教授）のもとで事務の大倉礼さんにも手伝ってもらい、更新版『日本研究 外国人研究員名簿』と『日本研究 外来研究員名簿』刊行に向けて、作業を進めています。今年度は外国人・外来研究員合わせて、すでに二〇ヶ国／五〇名以上が来所（予定）です。これは二八名の専任教員の倍近い人数です。

実は、わたしの専門は教育哲学・教育人間学で、このプロジェクトとは一見無関係なのですが、作業の過程で、日本文化の沃野に触れ、日本文化研究に魅せられた人生の悲喜交々を垣間みることができる、遣りがいのある人間学的なプロジェクトであると感じています。

（国際日本文化研究センター特任助教）

年中行事

児嶋　さなえ

仕事納めからあえて考えないようにしていた、年度末までの三ヶ月間にやるべき仕事を頭の中でスクロールして、「できれば来年はもうちょっと気楽に年始を迎えたい…」と思いつつ、四、五年が過ぎてしまった。

私は、研究協力課・研究支援係に所属する「研究支援プロジェクト員」である。

研究支援係の業務は、大きく分けると①日文研・共同研究会に関する業務、②総合研究大学院大学（総研大）に関する業務、③外部資金に関する業務の三つに分類される。

「研究支援プロジェクト員」の主な業務内容は、③外部資金に関する業務であり、外部資金や外部資金的な性格をもつ経費の公募・採択後の各種事務手続き、研究推進方法に関する相談、研究終了時の研究成果報告提出にいたるまでの研究者のお手伝いなどである。文字にしてみるとごく簡単な業務内容なのにどうして毎年、平穏なお正月が迎えられないのだろうかと思うのだが、残念なことに平成二七年の始まりもま

た気がついたら左胸をさすっていた。

外部資金に関わる部署ではどこの研究機関でも同じようなものではないかと思うが、一年の仕事のサイクルとして二度、仕事の山が来る。一月から三月にその年度の研究費の大多数を支出完了し、報告書の作成準備にとりかかる。四月は報告書の完成に向けた手続きと同時進行で翌年度の新しく採択された研究費の申請書の作成を始める。五月に入ると前年度の報告書を提出しつつ、翌年度採用の日本学術振興会特別研究員の採用応募手続きをすることになる。そして六月に最終報告書を提出するとやっと落ち着き始め、一つ目の山を越えたことになる。

もうひとつの山が九月から十一月にかけての科研費等の応募時期である。公募説明会に始まり、毎年更新される電子申請システムと格闘している研究者からの問い合わせに対応し、順次提出されてくる申請書をチェック、修正の依頼をする。二回から三回程度の修正とチェックを繰り返し、無事最終提出となる。

実は、この二つ目の申請の山と年度末に始まる執行の山には連続性がある。

科研費等の研究費の多くは四月に立ち上げ三月に当該年度の研究を終了させることになる。このサイクルにあわせて研究者が無理・無駄なく研究を実施し、当初予定していた研究目標や研究成果にたどり着くためのお手伝いをするには、年度末の三ヶ月に入る前にそれぞれの研究費と研究課題の特性を把握しておく必要がある。

それぞれの研究課題の特性を把握する方法として最も重要な情報源となるのは、応募申請時に研究者が作成した計画調書や申請書である。もちろん研究継続中に各年度提出する書類も研究の経過を知る上でとても重要ではあるのだが、計画調書や申請書には、研究期間全体を通した研究目標と研究方法及び、その研究目標を達成するための予算執行計画が記載されている。実際に採択されて研究を開始してみると想定していなかった事態にぶつかることもあれば、調査してみたら新たな発見があり研究方法の見直しをせざるを得ないということはままあることなので、応募申請時の書類に記載されていることすべてがその後の研究期間を通じて参考となるわけではない。しかし、計画調書や申請書の多くは十数ページにおよぶ大作であり、そこには研究者が自分の今後数年間の研究について真剣に考え抜いて練り上げた内容が詰まっている。

計十年ほど科研費をはじめとしたいろいろな研究費の応募書類を見てきたが、採択される申請書というのは、各設問に的確に回答を示し、最後まで読み切るとおおよその研究全体のイメージがすっと自然に頭に入ってくるものが多い。そのためには「申請書を書くテクニック」を必要とするが、申請書を書き慣れていない若手研究者の場合、記載する箇所が間違っている、同じことが繰り返し記載されているといったテクニック不足の申請書が散見される。こういった申請書であっても簡単なコメントをつけて修正案を提案すると、同一人物が書いたとは思えないほど劇的に完成度の高い申請書として戻ってくることがある。この劇的な変化を個人的に「爆ぜる」と呼んでいるのだが、この場合、単に形式が整っただけでなく、その研究者の中にあった「こんなことを突き詰めて研究したい」と内にため込んでいた強い思いが申請書に反映されていることが多く、まさに爆ぜた申請書となる。爆ぜた申請書に出会えた時、ふわっとその研究の世界に誘いこまれることがある。もちろん研究者でもない事務職が理解できている範囲はとても狭いと思うが、この研究をもっとたくさんの人に知ってもらいたい、ぜひ実現してほしいという気持ちを込めて最終提出ボタンを押すことになる。

若手を脱した先生方の書く申請書はすでに個人のスタイルが確立していることが多く、若手研究員のように根本的な修正をお願いすることはまずないのだが、時に同じように誘い込まれる申請書に出会えることがある。最初は実現不可能な壮大な夢の話が書かれているのかと思ってしまうのだが、申請書としての形が整ってくると夢は夢でもゴールへの道筋がぼんやり見えてくるのである。

夢の申請書に出会えた時、この仕事をしていてよかったなあと心から思いつつ、無事採択されることを祈る。それと同時に採択されたら大変だなあ、でもどうにかへし折れず実を結ぶようにお手伝いしないと…とも思うのである。

今日も応募申請時の書類を思い出しつつ、年度末の山の上り坂を上っている。研究者の意向をふまえて、あちこちの部署の事務担当者と執行について相談とお願いに長い通路を往復するのだが、研究支援係の仕事の大半は、研究者と一緒に考える、考えた結果を次の部署へ橋渡しをすることだと思う。六年間で応募申請から最終報告書提出まですべての手続きをお手伝いできた研究課題もあれば、来年以降、次へバトンタッチする研究課題もある。研究者が新しい研究を進めようとする最初の段階から成果を出す過程のほんの一部であっ

ても携わることができたことは本当に運がよかったと感じる。研究者の方々には失礼なことをお願いしたことも、ご迷惑をおかけしたことも多々あったかと思うが、最後に失礼を顧みずひとつ付け加えるならば、最近、日文研では出会う機会が少なくなってきた夢の申請書がおもむろに登場して外部資金担当を困惑させつつも、爆ぜる申請書として世の中に出ていくのをこっそり期待しているのである。

（国際日本文化研究センター研究協力課
研究支援係研究支援プロジェクト員）